

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 28 日現在

機関番号：52201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K06747

研究課題名（和文）山陰における近代建築の洋風要素導入過程に関する研究

研究課題名（英文）A study on the process of introducing Western-style elements in modern architecture in Sanin

研究代表者

安高 尚毅（ATAKA, NAOKI）

小山工業高等専門学校・建築学科・准教授

研究者番号：50341392

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では島根県の近代建築の伝播の地域的な展開を相対的に明らかにした。松江市ではセセッション・モダニズム様式は中央との時間差がないことを明らかとし、古典系の建築が建設されはじめたのが明治40年頃で、中央の建築家、山下啓次郎が様式を伝搬させ、さらに、明治41年に島根県土木課の藤本松太郎が本格的な古典系のデザインを行ったことを明らかとした。松江市の周辺地域では遅れて、大正期に松江の建築家達がこぞって洋式建築を建設した。擬洋風は警察署・学校の建設により伝搬し、その建設は標準図による可能性が高いことも明らかとした。石見地方では県庁所在地の松江から流入したのではなく独自の展開であったことを明らかとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代建築に関する調査報告事例が少ない山陰地方においては、詳細な記録資料を作成することが急務となっている。特に近代建築は時代の流れと共に解体され、その存在自体が忘れ去られようとしている。地域の文化を継承し、今後の地域振興につなげていくためにも、近代建築物の資料作成は大きな意義をもっている。本研究によって、はじめて島根県における洋風要素の導入過程を明らかにすることにつながると思われる点で学術的意義が高い。このことは日本に導入された近代建築の歴史を上書きすることになるであろうし、全国的傾向と関連付けて検証し、建築文化の交流・伝播に関する独自性を検討することが学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study relatively clarified the regional development of the spread of modern architecture in Shimane Prefecture. In Matsue City, it was clarified that the secession and modernist styles began to be constructed, and the central architect, Keijiro Yamashita, propagated the style. Furthermore, it was clarified that Matsutaro Fujimoto of the Civil Engineering Division of Shimane Prefecture made a full-scale classical design in 1891. In the area around Matsue city, architects of Matsue competed during the Taisho era to build western style architecture. The pseudo western style was transmitted by the construction of police stations and schools. It was also clarified that the construction is likely to be based on the standard map. In the Iwami region, it was made clear that it was a unique development rather than an inflow from Matsue, the prefectural capital.

研究分野：日本建築史

キーワード：近代建築 洋風要素 山陰 島根県

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

明治以降、文明開化にともない、伝統的な建築が近代化＝洋風化されるとともに、近代建築があらたに建てられるようになった。日本の近代建築の系譜については、藤森照信『日本の近代建築』によって体系化されており、全国的な近代建築の動向が概観される。しかしながら藤森氏の論考は、全国的な流れをダイナミックに叙述はしているが、地方の展開については必ずしも触れられているわけではない。地方における近代化＝洋風化は全国的な傾向とは必ずしも合致しないと考えられるし、地方独自の展開も存在するはずである。そのなかで山陰地方の近代建築に関しては、近代化遺産総合調査の報告書は刊行されているものの、個別事例の紹介にとどまっており、総合的な考察は行われていない。

近年、島根県では近代和風総合調査を実施され、松江市では歴史まちづくり部を発足させ、基礎調査や解体修理工事を実施しており、これらの成果をふまえて総合的な考察を行うことがようやく可能となった。本研究は、山陰地方における近代建築の洋風要素導入過程について包括的に研究するものである。特に山陰地方においては近代建築の調査報告が乏しく、記録されることも無く姿を消していく建築物が多い。

2. 研究の目的

本研究では、山陰地方に分布する近代建築について、建築意匠の記録を作成したうえで、様式伝播に着目し、その成立と展開を読み解いていく。主な研究対象は明治期から大正期にかけての近代建築とし、特徴的な事例を選定し、実測調査をすることで、様式の伝播による近代建築の地域的な展開を相対的に明らかにする。近代建築の文化的価値を総合的に示すと同時に、今後の街づくりに活用可能な資料として取りまとめることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では山陰地方の近代建築の洋風要素の導入過程について、文献調査、現地調査・実測調査、情報分析を実施し、包括的な検討をすることを目的としている。ただし、山陰と題しているが、予算配分の関係上、島根県を中心に検討を行うこととなった。

文献調査では、基本文献により島根県における近代建築の分布を確認する。特に古写真・図面を中心とした資料を収集し、特徴に応じて整理する。鳥取県については6棟の近代建築に関して図面資料を収集し、その傾向を読み取る。

現地調査・実測調査では、文献調査において抽出された建築物の中から調査可能な建築を選定し、外観写真の撮影、図面資料及び聞き取り資料を収集する。

情報分析では、以上の調査結果を統合し、近代建築について、様式・建築類型による検討を行なったうえで、山陰地方における文化伝播を考慮した比較分析を行なう。具体には近代建築の資料を収集し、その中でも古写真を分析の中心として、収集した資料を用いて、年代順に並べ、一覧表を作成し、島根県における近代建築の様式の変遷を明らかとする。

4. 研究成果

4.1 松江市：表1では古写真等が残存し、かつ、建築年代がおおよそ特定できるものを列挙している。これら以外に古写真が残るものもあるが、年代が確定できなかったため、本研究では取り扱わないこととした。古写真は全部で81葉に上る。

表1からは漆喰系擬洋風・下見板系擬洋風・ベランダコロニアル・古典系・セセッション風・モダニズムの様式を抽出することが出来る。この他に意匠的特徴として、ベランダの有無・オーダーの有無・ブローケンペディメントの有無・ジャイアントオーダーの有無・パラペットの使用・半切妻の使用・ドイツ壁の使用をあげ、石造とヴォールト屋根を例外として分類した。以下、様式の変遷について時系列を述べて行きたい。

漆喰系擬洋風建築は明治6年(1873)の芋町病院からで、明治36年の松江銀行本店までであることが知られる。下見板系擬洋風は明治12年の2代目島根県庁からで、昭和13年(1938)の浦郷農協までつくり続けられる。ベランダコロニアルは、明治12年の2代目島根県庁からで、明治36年松江市工芸品陳列所までであることが知られる。本格的な古典系の建築は明治41年のフレンチルネッサンス風の様式の島根県農工銀行で、設計者は山陰合同銀行安来支店を設計したことで知られる藤本松太郎(島根県土木課)である。昭和13年の2代目日本銀行松江支店まで、建築家によって建て続けられた。セセッション風の建築は大正4年(1915)の山陰貯蓄銀行からで、昭和3年の藤忠ビルまで続く。セセッションは日本では大正初期から流行するので、松江の建築も当事の流行をいち早く摂取していたといえる。モダニズムの建築は昭和4年の松江商工会議所からとなる。こちらも全国的

No.	名称	所在地	建築年	建築家	備考
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

な流行と合致している。オーダー風の意匠を使用した建築は早くから存在し、2代目島根県庁を嚆矢とし、長野宇平治設計の2代目日本銀行松江支店まで続く。ブローケンペディメントの意匠を使用した建築は明治20年の島根県尋常中学校からで、大正11年の松江高等学校講堂まで続く。半切妻の屋根を使用したものは明治33年第三銀行西郷支店からで、その後あまりみられないが、大正13年松江高等学校奥谷宿舎からまた徐々に作られたようだ。パラペットを用いた建築は大正5年の島根県婦人会館祥雲閣からとなる。

建築家は岡田時太郎、山下啓次郎、藤本松太郎、小笠原西三郎、岡田市蔵、西村義抽、大森茂、國枝博、秋鹿隆一、成田光二郎、山口文象、木子七郎、長野宇平治が活躍した。本格的な洋式建築を設計したのは山下啓次郎、藤本松太郎あたりからと言える。

機能別に見てみると学校・銀行・病院・郵便・事務所・住宅・商店・灯台・公会堂・博物館・駅舎の建築類型が存在する。事務所は28件で、下見板系から古典系・セセッション・モダニズムへと移行する。学校は21件で、下見板系・ベランダコロニアルで、ひな形を基にしている可能性がある。銀行は12件で、初期は漆喰系、後期に古典系・セセッションへと移行する。病院は7件で、傾向がみられない。郵便は4件で、すべて下見板系でひな形を基にしている可能性がある。

4.2 松江市を除いた出雲地方：松江市を除く出雲地方における近代建築の古写真等は全部で53葉に上る（表2）。内訳は出雲市23件、安来市14件、雲南市周辺10件、奥出雲周辺5件の結果となった。県庁所在地である松江市を中心に洋風要素が伝搬したと考えられ、これら周辺地域の様相を残される資料を基に明らかとしたい。

表2からは漆喰系擬洋風・下見板系擬洋風・ベランダコロニアル・ハーフティンバー・石造または煉瓦造・古典系・セセッション風の様式を抽出することが出来る。松江市に見られるモダニズムは見られなかった。この他に意匠的特徴としてオーダー風の有無・ブローケンペディメントの有無・フラットルーフの使用・半切妻の使用・ドイツ壁の使用をあげ、石造および煉瓦造とハーフティンバーを例外として分類した。以下、主要な様式について時系列を述べて行きたい。

漆喰系擬洋風建築は明治18年（1886）の大社警察署のみで、似た例としてモルタル大壁の大正7年（1918）の奥医院、モルタル塗りおよびタイル張りの大正9年の簸川銀行があ

No.	名称	所在地	建築年	建築家	備考
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

げられる。簸川銀行は木子七郎設計で、地方の特性に配慮したデザインであるとの指摘もある。下見板系擬洋風は、明治**18**年の広瀬警察署からで、昭和**14**年（**1938**）の木次小学校までつくり続けられる。息の長い様式であるといえる。ベランダコロニアルは、明治**18**年の大社警察署からで、明治**36**年広瀬町役場までであることが知られる。古典系の建築は出雲市では大正**2**年の和栗銀行、安来市では大正**3**年の安来銀行本店で、どちらも銀行建築であり、ルネッサンス風の本格的な造りである。安来銀行本店は藤本松太郎の設計で、森川弥三郎の施工である。セセッション風の建築は大正**12**年の日本基督教団横田相愛教会からで、昭和**13**年の八川郵便局まで続く。日本基督教団横田相愛教会は松江市の建築家、成田光二郎の設計で知られている。松江市の建築家が松江周辺で最新のデザインの建築を建設し、洋風建築の伝搬に寄与したようだ。オーダー風の意匠を使用した建築は早くから存在し、明治**22**年の安来小学校大市場校舎を嚆矢とし、藤本松太郎設計の安来銀行本店まで続く。安来市・出雲市に見られる。ブローケンペディメントの意匠を使用した建築は昭和**5**年の東須佐小学校からで、昭和**13**年の八川郵便局で昭和に入ってから取り入れられたデザインのものである。半切妻の屋根を使用した建築は大正**7**年の奥医院からとなる。パラペットは大正**4**年の出雲電気変電施設からとなる。

建築家は石橋絢彦、藤本松太郎、木子七郎、成田光二郎、木須井溥文、秋鹿隆一、松井芳一郎が活躍した。本格的な洋式建築を設計したのは安来市においては藤本松太郎で、大正初期に伝搬し、出雲市においては木子七郎が地方の特性に配慮したデザインを行い、本格的なデザインは伝搬したとは言い難い。その後、中国電力（株）乙立発電所、出雲郵便局、杵築銀行の建築が大正後期に建設され、セセッション風のデザインが伝搬した。奥出雲では成田光二郎がセセッション風の建築を大正後期に建築し、様式の伝搬が見られる。成田光二郎、木須井溥文、秋鹿隆一、松井芳一郎は地元の建築家で、大正後期から地元の建築家が活躍したことが判明した。

機能別にみてもと学校・銀行・病院・郵便・事務所・宗教施設とその他として灯台・発電所・変電所・駅舎の建築類型が存在する。事務所は**15**件で、明治から昭和までほぼ下見板系で占められる。学校は**11**件で、明治から昭和までほぼ下見板系で占められている。昭和**12**年安来小学校第一講堂で、管見の限り初めてセセッションで建築される。銀行は**3**件で、建築家による設計である。病院は**2**件で、傾向がみられない。郵便は**4**件で、下見板系で、ひな形を基にしている可能性を指摘できる。

4.3 石見地方：石見地方における近代建築の古写真は全部で**46**葉に上る（表**3**）。内訳は浜田市**16**件、大田市**8**件、江津市**7**件、津和野町周辺**7**件、邑智郡**4**件、益田市**4**件の結果となった。この偏りからは必ずしも県庁所在地である松江市を中心に洋風要素が伝搬したようではない可能性も推測される。以下、石見地方の洋風建築の様相を明らかとしたい。

表**3**からは漆喰系擬洋風・下見板系擬洋風・ベランダコロニアル・煉瓦造・古典系・セセッション風・モダニズム・ゴシックリバイバルの様式を抽出することが出来る。出雲地方に見られなかったモダニズムを見ることが出来る。外観の意匠的特徴については、松江に見られたジャイアントオーダー・ブローケンペディメント・ポールトが見られない。この他に意匠的特徴として、オーダーの有無・パラペットの使用・半切妻の使用・ドイツ壁の使用をあげ、例外として分類した。以下、主要な様式について時系列を述べて行きたい。

漆喰系擬洋風建築は明治**5**年（**1872**）の神道中教院からで、松江の芋町病院よりも**1**年早く建設される。大正**6**年（**1917**）の服部商店まで建て続けられる。下見板系擬洋風は、明治**25**年の島根県立浜田測候所からで、松江市が明治**12**年からであり、この様式が作り始めるのは若干遅い。明治**35**年の浜田高等女学校あたりからどんどん建設された。その後、

No.	名称	所在地	建築年	建築家	施工者	建築様式	備考
1	神道中教院	松江	1872			漆喰系擬洋風	
2	芋町病院	松江	1873			漆喰系擬洋風	
3	安来銀行本店	安来	1874	藤本松太郎	森川弥三郎	ルネッサンス風	
4	出雲電気変電施設	出雲	1875			下見板系擬洋風	
5	安来小学校大市場校舎	安来	1887	藤本松太郎		オーダー風	
6	日本基督教団横田相愛教会	松江	1899	成田光二郎		セセッション風	
7	八川郵便局	松江	1908	成田光二郎		セセッション風	
8	中国電力（株）乙立発電所	松江	1910			セセッション風	
9	出雲郵便局	松江	1911			セセッション風	
10	杵築銀行	杵築	1912			セセッション風	
11	安来銀行本店	安来	1917			ルネッサンス風	
12	服部商店	松江	1917			漆喰系擬洋風	
13	島根県立浜田測候所	浜田	1900			下見板系擬洋風	
14	松江市庁舎	松江	1912			下見板系擬洋風	
15	東須佐小学校	松江	1905			ブローケンペディメント	
16	出雲市庁舎	出雲	1910			下見板系擬洋風	
17	奥医院	松江	1878			半切妻	
18	大田市長官舎	大田	1915			下見板系擬洋風	
19	江津市長官舎	江津	1915			下見板系擬洋風	
20	津和野町庁舎	津和野	1915			下見板系擬洋風	
21	邑智郡庁舎	邑智	1915			下見板系擬洋風	
22	益田市庁舎	益田	1915			下見板系擬洋風	
23	大田市長官舎	大田	1915			下見板系擬洋風	
24	江津市長官舎	江津	1915			下見板系擬洋風	
25	津和野町庁舎	津和野	1915			下見板系擬洋風	
26	邑智郡庁舎	邑智	1915			下見板系擬洋風	
27	益田市庁舎	益田	1915			下見板系擬洋風	
28	大田市長官舎	大田	1915			下見板系擬洋風	
29	江津市長官舎	江津	1915			下見板系擬洋風	
30	津和野町庁舎	津和野	1915			下見板系擬洋風	
31	邑智郡庁舎	邑智	1915			下見板系擬洋風	
32	益田市庁舎	益田	1915			下見板系擬洋風	
33	大田市長官舎	大田	1915			下見板系擬洋風	
34	江津市長官舎	江津	1915			下見板系擬洋風	
35	津和野町庁舎	津和野	1915			下見板系擬洋風	
36	邑智郡庁舎	邑智	1915			下見板系擬洋風	
37	益田市庁舎	益田	1915			下見板系擬洋風	
38	大田市長官舎	大田	1915			下見板系擬洋風	
39	江津市長官舎	江津	1915			下見板系擬洋風	
40	津和野町庁舎	津和野	1915			下見板系擬洋風	
41	邑智郡庁舎	邑智	1915			下見板系擬洋風	
42	益田市庁舎	益田	1915			下見板系擬洋風	
43	大田市長官舎	大田	1915			下見板系擬洋風	
44	江津市長官舎	江津	1915			下見板系擬洋風	
45	津和野町庁舎	津和野	1915			下見板系擬洋風	
46	邑智郡庁舎	邑智	1915			下見板系擬洋風	

昭和 13 年 (1902) の跡市小学校まで造り続けられる。ベランダコロニアルは、明治 5 年の神道中教院からで、明治 20 年の大森警察署までである。古典系の建築は大田市の大正 9 年の静間銀行のみである。ここでも銀行建築が本格的な洋風建築として伝搬したことが知られる。残念ながら設計者はわからない。セセッション風の建築は大正 11 年の浜田商業銀行本店からで、昭和 12 年の都野津会館まで続く。この様式も松江とほぼ同時期に流入した。初期モダニズムは昭和 3 年の有福温泉御前湯からである。本格的なモダニズムは昭和 5 年の布施時計店のみである。松江のモダニズムが昭和 4 年にみられ、同時期にモダニズムが現れる。ゴシックリバイバルの建築として昭和 4 年の津和野カトリック教会があり、例外的存在である。オーダー風の意匠を使用した建築は早くから存在し、明治 10 年の浜田警察署を嚆矢とし、昭和 13 年の跡市小学校まで続く。半切妻の屋根を使用した建築は大正 11 年の錦座のみとなる。出雲地方と傾向が同じである。パラペットは大正 11 年の浜田商業銀行本店からで、出雲地方よりも多い。ドイツ壁を使用した建築は大正 10 年の岡医院からで、ドイツ壁も大正 10 年と導入時期が早い。

建築家は豊田藤太郎、和泉利三郎、川原正治、岡田孝男、近藤常次が活躍した。本格的な洋式建築を設計したのは昭和 4 年の津和野町における川原正治で、川原は長崎県のカトリック中町教会天主堂を施工したことで知られる。大田市においては岡田孝男がモダニズム風の建築を昭和 9 年に建築し、様式を伝搬した。また、豊田藤太郎は江津市本町の材木商で、神戸で教会建築を見学し、擬洋風建築を建設したことが知られている。和泉利三郎は興雲閣を施工したことで知られ、松江で洋風建築を勉強した後に、温泉津で擬洋風建築を手がけた。

機能別にみえてみると事務所・学校・銀行・宗教施設・商店・郵便、その他として灯台・測候所・変電所・温泉施設・練兵場の建築類型が存在する。事務所は 14 件で、明治前期には漆喰系であるが明治中期から下見板系へと移行する。学校は 7 件で、明治から昭和まではほぼ下見板系で占められている。銀行は 4 件で、半数がセセッション風の建築である。商店は 4 件で、大正期が漆喰系、昭和期がセセッション風の建築である。

4.4 鳥取県を軸とした柱間寸法の検討

山陰における近世までの柱間寸法は京間であったが、現在においては在来工法の住宅以外は江戸間が主流となっている。これには明治期に学校や駅舎、役所や郵便局といった近代に流入した擬洋風・洋風建築が少なからず影響した。

山陰特有の建築として、明治 35 年の明治天皇の山陰行啓にあわせて建築された宿泊所が 4 棟残るが、近代和風建築である飛龍閣・御便殿の柱間寸法は京間であるのに対し、山陰を代表する洋風・擬洋風建築である仁風閣・興雲閣は江戸間である。中央の建築家による設計と、畳敷の部屋がないことが江戸間の導入の要因であろう。また学校建築では明治 25 年に学制が公布され、あわせて「文部省制定小学校建設図」により教室の大きさや片廊下の平面プランなどの学校校舎の規範が示された。そのなかで「柱八六尺間以内二建テ入レ」とあり、学校校舎の基準柱間寸法は江戸間が推奨された。印象的なポーチを備える岩井小学校校舎もその一例である。官舎・駅舎建築でも「小停車場本屋標準図」が示され、江戸間を基準柱間寸法とする駅舎の図面が流布され、地方では画一化された駅舎が建設された。明治 35 年に開通した山陰本線の唯一残存する御来屋駅本屋も標準図に基づいた洋風の駅舎である。以上より、江戸間が建築家および標準図により伝播したことが判明した。

4.5 まとめ

以上、本研究では鳥取県に存在した近代建築は漆喰系擬洋風・下見板系擬洋風・ベランダコロニアル・古典系・セセッション風・モダニズムの様式があることが明らかとなった。松江市ではセセッション風・モダニズムのものは中央とのタイムラグがないことを明らかとし、本格的な古典系の建築が建設されはじめたのが明治 40 年頃で、中央の建築家山下啓次郎が伝搬した。さらに、明治 41 年に鳥根県土木課の藤本松太郎が本格的な古典系のデザインを行う。松江市の周辺地域では遅れて、大正期に入り松江の建築家たちがこぞって洋式建築を建設した。擬洋風は警察署・学校の建設により伝搬し、その建設は標準図による可能性が高いことも明らかとした。石見地方では県庁所在地の松江から流入したのではなく独自の展開があり、松江の影響は和泉利三郎によるものであることが明らかとなった。以上、建築家と標準図により洋風要素が伝播し、また、その具体的時期について明らかとしたことが本研究の成果といえよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 安高尚毅・金澤雄記・足立正智・坪倉菜水
2. 発表標題 古写真からみた松江市および隠岐郡における近代建築の変遷
3. 学会等名 日本建築学会中国支部研究報告会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 文化庁文化財第二課	4. 発行年 2020年
2. 出版社 文化庁文化財第二課	5. 総ページ数 281
3. 書名 近代遺跡調査報告書-商業・金融業-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	金澤 雄記 (KANAZAWA YUKI) (40646270)	米子工業高等専門学校・その他部局等・准教授 (55101)	